

Doshisha University Center for the Study of the Creative Economy

Discussion Paper Series No. 2018-06

東日本大震災とスローなビジネス
気仙沼のみなとまち文化を支えてきた「亀の湯」

松野光範



Discussion Paper Series

東日本大震災とスローなビジネス

気仙沼のみなとまち文化を支えてきた「亀の湯」¹

松野光範²

はじめに

「亀の湯」は、学生のボランティア活動の際の憩いの場であった。2013年9月、我々の宿舎は東日本大震災の際に、気仙沼の内湾地区の人びとの避難所となった紫神社であった。震災直後は150名ほどが避難し、トイレが1ヶ所、しかも風呂がないという制約の中で、仮設住宅ができるまで身を寄せ合って暮らしていたところである。合宿した学生は36名であったが、活動時間が支援先により異なることなど、かなりの制約条件の中での合宿であった。我々引率教員の仕事は、朝学生をボランティア先に送り届けること。夕方には迎えに行き、風呂を浴びて夕食の後にミーティングというスケジュールであった。ボランティア先の多くは水産加工場で、見知らぬ大人の中で、これまで携わったことのない仕事を終え、「亀の湯」で汗を流すのが、学生にとってほっこりする時間でもあった。一方、水揚げを済ませた漁師さんたちの憩いの場でもあった。

ボランティアを終えた各チームが、異なる支援先での1日の活動について共に語り合っているときに、漁師さんが加わる。まずは出身地、そして学生の労をねぎらう。他の県から魚を追い気仙沼に来ている年配の漁師さんたちとの交流は、学生にとって一番の思い出であったようである。

翌年の春休みのボランティア活動では、寒い時期でもあり温泉ホテルの大部屋での合宿であった。ホテルの温泉大浴場でゆっくりと汗を流し、手足を伸ばせるにもかかわらず、気仙沼2度目の学生が案内役となり、「亀の湯」に通っていた。

学生たちにとって憩いの場であった「亀の湯」は、近隣住民とっても漁師にとっても憩いの場であり、棚には船の名前が書かれた洗面器がぎっしりと並んでいた。休憩室は、水揚げのために立ち寄った漁船の乗組員とボランティアにやってきた学生が出会う場であり、普段の生活ではありえない世代を超えた交流場であり、気仙沼の長い歴史と共にそれを見

¹ 本論文は日本学術振興会の「課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業（H27.10～H30.9）」の成果の一部である。

² 同志社大学ライフリスク研究センター嘱託研究員

守っていたのがオーナーの齋藤夫妻であった。

本論では、地域社会における銭湯の役割と「亀の湯」の概要および被災後の様子、そして人と人をつなぐ場として、気仙沼の港町の文化の一翼を担った銭湯の役割について検討する。

1. 地域社会における銭湯の役割

銭湯とは、「公衆浴場法」に「温湯、潮湯又は温泉その他を使用して、公衆を入浴させる施設」（第1条）と定められている。さらに、「普通公衆浴場」と「その他の公衆浴場」とに分けられ、「普通公衆浴場」とは、「日常生活における保健衛生上必要な入浴のために設けられた公衆浴場」と定義されている。さらに、各都道府県の条例では、施設の衛生基準や浴槽水の水質基準などが定められ、入浴料金も一定の額が定められ、日常生活の公衆衛生の確保という役割を担っていた。

わが国において銭湯は、江戸時代から明治・大正を経て第二次世界大戦前まで、地域社会の集会場のような機能を果たしていた。共同浴場として公衆衛生の確保という機能を担うだけではなく、その地域の人びとが集まり、1日にあったことなど話し合う情報交換の場ともなっていた。しかし戦後、持ち家促進や生活の近代化の名のもとに内湯が進み、生業としての銭湯は衰退の一途をたどっていった。

一方、地域にはコミュニティセンターと名づけられた施設が各地域につくられるようになったが、そこでは銭湯でのような活気は再現しなかった。俗に「裸のつきあい」というが、くったくなく互いのホンネを言い合えるような人間関係はできなかったようである。

2. 「亀の湯」の概要

亀の湯の脱衣場の棚には、一般の町の銭湯とは異なり漁船名の書かれた洗面器に入れられた石鹸やシャンプーなどの入浴用品が、ぎっしりと並んでいる。かねてより漁師たちの憩いの場であった「亀の湯」は、大島へのフェリーが発着する船着場から5分の距離にあり、係留している船から歩いて通える気仙沼で一番便利な銭湯である。明治から続く老舗の銭湯で、4代目にあたる齋藤夫妻が営むこの銭湯は、近隣の人達のみならず、水揚げに寄港する漁船の乗組員たちが利用する湯であり、気仙沼を襲った大火や津波などの災害を経験していた。

裏手の太田地区には飲食店街があったとのことで、大きな料亭や小料理屋が軒を連ねて

いたという。³「亀の湯」はそのちょうど入り口にあたり、御主人の斎藤さんは子供のころ午後6時以降の外出は禁じられていたとのことである。

水揚げのために寄港した漁師たちが、体を洗い手足をゆっくりと伸ばすことのできる憩いの場であり、情報交換を終えたのち坂道を登って小料理屋で一杯飲む、明日への鋭気を養うための基地でもあった。

入口を入ってすぐの談話コーナーには、冷たい飲み物や温かいお茶に茶菓子や果物が用意されていた。ボランティアの学生たちは、亀の湯に併設されたコインランドリーでの洗濯が終わるのを待ちながら、自分たちの祖父母と同じような年代の漁師たちとの会話を楽しんでいた。当初は遠慮がちに話をしていた学生たちも、漁師たちから震災前の気仙沼の様子や漁の様子を聞き、出身地である大阪の話など会話ははずんだ。1週間の滞在ですっかり打ち解け、学生にとって気仙沼でもっとも居心地のよい空間であったのではないかと思われる。

このように、「亀の湯」は明治・大正・昭和・平成の長きにわたり、気仙沼の繁栄や災害などの歴史とともに存在し、基幹産業である漁業や港町の文化を支えてきたビジネスである。しかしながら、昨今は住宅に必ずと言っていいほど内湯が設置されるようになり、毎年減少を続けている斜陽のビジネスでもある。

3. 被災後の「亀の湯」

2011年3月11日南町や魚町などの内湾地区が津波に襲われた。亀の湯も被災し見渡す限り廃墟と化したという。内湾地区は海拔が低く、近隣に住んでいたほとんどの住民が被災し、再開はほぼ絶望的であったという。斎藤夫妻は逃げ遅れ、屋根伝いに隣のビルの屋上で、寒い一夜を過ごした。魚の水揚げ再開後、顔なじみの漁師が見舞いがてら訪れ、銭湯の再開を望んだが、再開する意欲も見込みもたたなかつたという。

そのような時期に、漁協からの依頼で大阪府池田市の支援で「池田ふれあいの湯」が開設されることになった。設備を提供した池田市のホームページには、表1にあるよう
2011年7月8日被災者用入浴用品の受付開始し、入浴用品の発送・設置のためのボランティアの出発や亀の湯に池田ふれあいの湯が開設されたことが紹介されている。しかも3

³ 川島秀一著「気仙沼漁港のみなと文化」には、「港からすぐの坂道に並んでいた「太田」の歓楽街は、外来船の船員たちが、「どんなに疲れていても、あの坂をのぼっていった」と言われるくらい繁華なところであった。もともとは太田の沢の水がおいしく、その水を求めに船員たちが立ち寄ったところであったが、その水を用いた茶屋ができ、後に歓楽街になるまで発展した」と紹介されている。

ヶ月間は、燃料代や水の運搬費なども池田市が支援を続けたとのことである。

表 1: 大阪府池田市の気仙沼市への震災支援 (2011 年)

7月8日	被災者用入浴用品の受付を開始
8月4日	寄贈を受けた入浴用品約 14,000 点を積み込んだボランティアのトラックが、市役所から宮城県気仙沼市に向けて出発
8月5日	気仙沼市に向けボランティアの乗ったバスが出発
8月6日	気仙沼市の銭湯「亀の湯」に「池田ふれあいの湯」開設
12月5日	気仙沼市の銭湯「亀の湯」に開設していた「池田ふれあいの湯」を閉鎖

出典：池田市の HP より気仙沼に関する記述を抜粋し筆者が表に整理

齋藤夫妻は、被災により銭湯の再開が難しいと考えていたが、「池田ふれあいの湯」の被災した亀の湯への設置と、その後の清掃・管理を引き受けた。営業時間は午後 2 時から午後 7 時までであったが、出航の漁船員のために早朝から営業をしたり、夜遅く寄港する漁船のために便宜も図った。これらの活動により、自分たちの仕事の意義を取り戻すとともに自信を得たという。特別融資を受ける決断をし、「亀の湯」の再開を果たすこととなった。

再開後は、近所の常連や寄港した漁師に加え、新たにボランティアにきた若者が加わり、これまで以上の賑わいと交流が繰り広げられてきた。ボランティアに来た学生が再びボランティアとして訪れる。数年前にボランティア活動に参加した学生が卒業旅行に訪れるなど、これまでになく交流も生まれた。

2016 年、気仙沼市の方針で港周辺の嵩上げ工事の方針が決定した。家屋を含めた銭湯の施設を自費で全面的に撤去し、土地の嵩上げ工事終了後に家屋と銭湯の設備を自費で新築しなければならないという事実と直面した。土地の嵩上げのための休業期間と仮住まいの費用に加え、新たな設備投資という課題が立ち上がったのである。しかも、隣に新築された復興住宅には内風呂が備えられているという現実、さらには 5 代目となる後継者がいないということもあり、2017 年末での廃業を決めた。

4. 人と人をつなぐ場としての銭湯

日本の銭湯の歴史は江戸時代にさかのぼる。江戸時代になり、これまで蒸し風呂中心であった風呂が、下半身を湯にひたし、上半身に湯気を浴びるというスタイルになり、明

治、大正と時代が進み、現在の男女別の大きな浴槽に洗い場という入浴方法が定着した。木造であった洗い場や浴槽はタイル張りになるなど、現代の銭湯の姿になったという。その銭湯も高度成長と都市化による住宅の郊外化により各家庭に内風呂が備えられるのが当たり前の時代になり衰退していった。さらには燃料価格の高騰、施設の老朽化、後継者不足に加えスーパー銭湯などの新たなビジネス上のライバルの出現により、一部の銭湯を除き経営難に直面しているのが実情である。

東日本大震災の後に日本中に、つながり・絆という言葉が広がった。裸の付き合いという言葉があるが、大きな風呂に一緒に入り、体だけでなく心の中までぼかぼかになる。同じように、心がぼかぼかになった人がいる。そして心がぼかぼかになった人が、隣の心がぼかぼかになってくつろいでいる人に話しかけ、友人になる。こんな関係がご近所のコミュニケーションの始まりではなかったか。風呂で走り回る子供たちを年寄りが、たしなめる。こんなことを通じ子供たちが社会のルールやマナーを学んでいく。銭湯は入りにくる人同士が、それぞれの年齢や仕事・立場に関係なくコミュニケーションが生まれる場、これが、時代が変わっても変わらない銭湯の魅力のひとつである。つまり、銭湯は地域の人と人をつなぐコミュニケーションの「場」を提供していたのである。

そして、「亀の湯」は人と人をつなぐ「場」として機能してきたことに加え、震災後の気仙沼で震災復興の一拠点としての機能を果たしたことが指摘できる。風呂に入るという裸の付き合いを通して、地域人々をつなぐ「場」として機能するとともに、ボランティアに参加した学生を地域コミュニティに受け入れる入口としての機能を果たしていたのである。

おわりに

気仙沼はリアス式特有の地形に恵まれた天然の良港といわれている。台風接近の際には他県の船が避難のために身を寄せる安全で大きな港である。震災後、魚市場が復活したのは、他県の船が競って水揚げをした結果、現在もカツオの水揚げ日本一の座を維持している。水揚げはカツオにとどまらず、世界の三大漁場のひとつである三陸沖をかかえサンマやマグロなど豊富な魚種に恵まれている。

また、気仙沼は風待ち港といわれ、帆掛け船の時代には船出に適した風を待ったためにこう呼ばれていたという。その一方、風の通り道でもあったわけで、土地の人は北西の風を「ナライの風」と呼び、これが災いし大正4年（1915年）と昭和4年（1929年）の

二度にわたり大火に見舞われている。

さらには、地震の多発地帯であり、地震に伴う明治三陸大津波（明治 9 年（1896））、昭和三陸大津波（昭和 8 年（1933））の被害を受け、地球の反対側で発生したチリ地震津波（昭和 35 年（1960））でも大きな被害を受けている。

気仙沼は、このような数度にわたる大きな災害から立ち直ってきた街であり、これを支えてきたのが基幹産業である水産業である。2017 年 9 月 23 日に南町地区の商店街が一部オープンした。工事はさらに続き、災害に強い地区として再開発される。スロー村（仮称）ができ、外来の人や地元の人たちの交流の場が計画されている。しかし、そこにはこれまで魚を追い気仙沼に水揚げをし、気仙沼の経済と文化を支えてきた漁師たちの姿は描けない。スローシティ気仙沼の基幹産業である水産業を底辺から支え、港町の文化を支えてきたスローなビジネスのひとつが消えていくことに寂しさを禁じ得ない。

以上

参考文献ほか

川島秀一「気仙沼漁港の「みなと文化」」一般財団法人 みなと総合研究財団
港別みなと文化アーカイブス、2014 年.

<http://www.wave.or.jp/minatobunka/archives/index.html>

倉又光顕『東日本大震災“あの日”そして 6 年—記憶・生きる・未来』彩流社、2017 年.

中野栄三『入浴・銭湯の歴史』雄山閣、1994 年.

池田市ホームページ「池田市の対応について」

<http://www.city.ikeda.osaka.jp/soshiki/sichokoshitsu/kikikanri/gyomu/bosai/1415930545532.html>

気仙沼市総務部危機管理課：気仙沼津波フィールドミュージアム

http://www.tsunami-museum.com/kesenuma/ke_001